

## クロスカントリースキー大会、旭岳カップ

「旭岳山頂が最後に見えたのは10日前だけ、2週間前だったっけ?」。

温度計は常に氷点下、雪かきはほぼ毎日続き、初旬に足首程度の深さだった積雪は、暮れには背丈をはるかに越えることもあり、大雪山が日に日に大雪山（おおゆきやま）らしくなる。12月はそんな月です。



11月の雪が針や棒のような形や枝のないただの六角形なのに対して、師走の雪は、大人の私たちに我を忘れさせる魅力的な「雪印」、型の結晶となって降ってきます。結晶一粒ひとつぶをカメラに収めようとしているうちに、気がつくともカメラのバッテリーは切れかけ、すっかり手がかじかんでいることもしばしばです。

この時期はまた、11月から合宿入りしている全国のクロスカントリースキーの選手にとってシーズ

ン前最後の追い込みです。



旭岳カップ

ン前最後の追い込みです。

今年第10回の旭岳カップ記録会は、12月3日に開きます。ライバル校の選手同士が協力し合って練習の合間を縫って準備し、自主運営してきました。その年のシーズンを占うことができる、ともいえる記録会です。国内トップクラスのチーム選手ばかりですから、来たるシーズンの成績を示唆する記録会といえます。

野球でいえばオープン戦のような時期。無名選手が上位選手を出し抜き、社会人と中学生が同じ条件で競い合い、シーズンに入るとなかなか見られない光景を見ることが出来ます。

旭岳ビジターセンター 菊地 基



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。



## 三蔵法師

国際交流員

王 佳夢

日本人のみなさんは「西遊記」の物語はご存じでしょう。物語の中で三蔵法師はちよつと変わった弟子4人と一緒に西天へ真の経を求めに行きました。では歴史上の事実はいったいどんなことが起きていたのでしょうか?

西暦626年、28歳の玄奘（げんしやう、敬称三蔵法師）はインドへ仏学を勉強しにいくことを思いました。皇帝（唐・太宗）に国境を越えることを申し出しましたが、国境の状況がまだ不安定なので断られました。西暦627年秋に、突然の霜害と飢饉（ききん）の発生によって避難する人が増えたので、玄奘は難民の中に混ざって長安を離れました。

「西遊記」の物語の中に登場するような妖怪と頻りに出会ったりはしないですが、旅は栗毛の老いた馬を連れ、砂漠を横断して歩き、妖怪の幻覚が見えるほど大変でした。顔が整っていたので女神に捧げる生贄（いけにえ）に

びったりだと思われ、殺されそうになったこともありました。

4人の弟子を迎え入れましたが、そのうち2人が雪山を越える時亡くなって、他の2人も歴史に名も残らないままでした。

数えきれない困難を乗り越え、19年を経て2万5千キロメートルを歩き、110カ国を訪れ、印度（インド）で仏経典を勉強してから帰国しました。

657部の仏経典を持って帰って47部千335巻を翻訳しました。それは前人未到の偉業でした。千年ぐらい経て、16世紀の半ばに、三蔵法師の伝説をもとに呉承恩が「西遊記」を世に出したのです。



※呉承恩11506ころー11582年没。「西遊記」の作者とされています。中国・明代の官吏、文人。山陽（江蘇省）の人で字（あざな）は汝忠（じよちゆう）、号は射陽山人。